

オリキャンレポート'97

～キャンブにまつわるエトセトラ～



去る4月の26・27日、広島県立県民の森キャンプ場において、今年で5回目を数える総科テーションキャンプが行われた。しかし、バスで3時間もかかるという超遠距離地での開催のオリキャンの特筆事項なのではない。サブスタッフ（途中参加スタッフ）制の導入、シン企画の実施等、従来になかった様々な試みが行われた今年のオリキャンを特集してみた。

今回、キャンプを作っていく学生の募集に新しい形態が組み込まれた

サブ・スタッフ：バイトやサークル等で忙しく、キャンプ作りに長い間関わる事ができない人たちから募集した。その目的は、新入生が会う先輩の層に幅をもたせることと運営面での人材を確保することであった。

サブ・スタッフは30人ほど集まり、3月中旬からキャンプ作りに関わった。一年生との交流と雑用が主な役割であった。



スタッフ：前年の10月頃に募集、上級生の有志により結成される。オリエンテーションキャンプを実際に企画・運営していく集団。今年は07生数名と08生40名ほどで構成され、例年よりはやや小規模になった。スタッフは、執行・企画・生活・広報という部署に分かれ、それぞれの部署で仕事を進める。そして全体会議で部署間の意志疎通を行うというシステムだった。また、新入生は入ってきたあとに12,3名ほどからなる班単位で活動するが、このときの各班の責任者であるフェローは、スタッフの中の希望者になった。

ファイヤーの盛り上げ役
「激男MASDA（マスタ）」

オリエン
が、今年
ポジウム

▽一日目▽

8:30 集合
9:00 出発
13:15 到着
13:30 開村式
14:00 昼食
14:30 シンポジウム
15:50 炊事
夕食
19:00 ファイヤー
21:00 就寝

タイムスケジュール

& 企画説明

シンポジウム

学生側からと教官側から数名ずつが前に出て、「総合科学部でどう学ぶか」というテーマのもと討論をおこなった。司会が一人別について進行係をつとめ、他の学生、教官は聴衆にまわった。

ファイヤー

キャンプファイヤー。スタッフが考えた様々なゲームや、フォークダンスをした。小さな火（ミニファイヤー）を10人ほどの班で囲んでこれからの夢について話す時間もあった。

▽二日目▽

6:00 起床
7:00 朝食
9:30 ストーカー
12:00 昼食
ディスカッション
14:30 閉村式
15:30 出発
19:30 到着

ストーカー

オリエンテーリングと人物推理ゲームを併わせた企画。キャンプ場内をまわり、チェックポイントで様々なミニゲームを行い、ヒントを集め最終的に一人の人物を探す事が目的となるゲームである。

ディスカッション

学生は十数人からなるホスト班に分かれ、教官を交えて、前日のシンポジウムを踏まえながら、これからの学生生活について真剣に考えるという企画であった。ホストと呼ばれ進行役が各グループに一人ついた。

飛翔委員会検・検査 ㊞

◇参加者の声

初めてオリキャンに参加して

布川 弘 (地域文化コース 助教授)

行く前は、いろいろな噂を耳にしておりましたので、破天荒な雰囲気どこまでついていけると心配しておりましたが、いたって真面目な企画だったので大変感心しました。とりわけ、総科のあり方を考えるシンポとディスカッションはとても収穫がありましたし、夕食作りなどの班活動も大変楽しかったです。時間に余裕があれば来年も参加したいと思っています。

総科のあり方については、とても有益な意見が聞けました。総合科学といながら必修単位が多く理系・文系の垣根が高いなどの批判が多かったです。この問題はこれからのコース再編論議でも検討しなければならない重要な問題だと思いました。また、総合的な学問を作り上げていく努力が足りないのではないかなど、教官の姿勢について疑問を投げかける人も多かったように思います。スタッフの人たちと反省会の後に飲みましたが、そ

の席では講義のレベルやカリキュラムのまずさなど、もっと鋭い批判が矢継ぎ早に出され、就任後八ヶ月にして平身低頭しておりました。学生の意見をできるだけ反映してほしいとのことでしたので、新米教官ではありますが、自分の襟を正しながら様々な場で意見を紹介していきたいと思っています。

それにしても、総科について考えるシンポジウムなどは、本来教官全員参加を原則としてもおかしくないテーマなのに、学生の自主的活動の場であるオリキャンに持ち込まれるのは、スタッフの人たちの過重負担になってあたりまえです。スタッフの献身的な努力を目の当たりにしただけに、大きな矛盾を感じさせられました。

さて、オリキャンの体験は学生諸君のその後にどんな財産としてのこっていますか。それを聞く場がほしいような気もします。

今年も新入生オリエンテーションキャンプに参加しました。

山本 秀康 (学生係長)

4月26日(土)午前9時に総合科学部前を出発。2時間半ほど大型観光バスに揺られて、総勢290名が目的地である島根県との県境に位置する比婆郡西城町油木の、広島県、県民の森・六の原地区に到着しました。バスを降りると標高800mの高原の風が爽やかで、このあたりはやっと春が始まったばかりという感じです。

初日の昼食は弁当で、班ごとに持参したものをいただきました。私は何一つ手伝いをしていないのに、学生が夜遅くまで真心を込めて作った手作りの弁当をごちそうしてくれました。心の中で学生に感謝しながらいただきました。むすび、鳥の唐揚げ、厚焼きたまご、野菜サラダ、手作りミニハンバーグ、それに鰯ハンバーグ、サンドイッチまでありました。

また、今年のオリキャンの新企画として、初日のシンポジウムと二日目の班別ディスカッションがありました。いずれも熱心に討論し合い、総合科学部の総合について認識を深めることができました。

ところで、学部学生研究室(旧第3会議室)には、学生スタッフが毎夜22時過ぎぐらいまでオリキャンの準備に追われていたようです。オリキャンも毎年実施するようであれば、実施計画のマニュアルを作成保存し、それを次の学生スタッフに引き継ぐとか継承するとか、言わば文化遺産の伝承のようなことを考える必要があるのではないかと、この準備のために極端なエネルギーを注ぎ過ぎることは、問題ではなからうかと感じた次第です。

それと、新入生歓迎行事の一環として、プレオリキャン活動を含め新入生との交流を深めるということで、深夜まで彼らを引き留めることも慎まなければいけないことのように感じています。この点に関して言えば、総合科学部では問題が無かったように思います。

何はともあれ、本年度のオリエンテーションキャンプは大きな事故も無く、無事に終了できたことを嬉しく思っている今日この頃です。

オリエンテーションキャンプについて

柳井田 忠茂 (自然環境研究コース3年)

'97オリエンテーションキャンプも、大きな事故もなく、無事に終わる事ができ、代表者としての一応の責任は果たせたのではないかと、ほっとしています。また、多くの新入生に参加して頂いてスタッフ一同うれしく思っております。大学生生活のスタートとして良い機会だったのではないかと思います。

今回のキャンプでは、場所を野活(野外活動センター)から県民の森へと移したり、サブ・スタッフを設けたり、企画としてはシンポジウムを取り入れるなど新たな試みがありました。また昨年とは違い、運営面に関しても2年生スタッフを中心となってやってきました。このキャンプは、すべてにおいて2年生スタッフ主体で作られたかと言って良いのではないかと思います。3年生スタッフが数人しかいず、十分なサポートが出来ないために2年生スタッフに負担を負わせてしまったのは申し訳ないと思っています。

私は去年のキャンプと最も違うのは、スタッフとしてのオリエンテーションキャンプに対

する意識ではないか、去年よりも確実にキャンプの目的について真剣に考える機会があり、考える人の数も多かったのではないかと、それゆえに昨年よりも友達作りとオリエンテーションのバランスの良いキャンプができたのではないかと思います。私の中では、経験した3回のキャンプで一番良いキャンプでした。

是非、オリエンテーションキャンプの目的をよく考えて、今回の良いところは一代限りではなく引き継いでいき、改善すべきところは改善して、より一層良いキャンプにして頂きたいと思っています。



オリエンテーションキャンプを終えて

奥田美奈子 (一年生)

大学というのは全国各地から人が集まるわけで、入学当時同学部には友達がいるというのはごく希なことだろう。そんななか不安な気持ちになったのは私だけではないはずだ。しかし、オリキャンの班活動に参加していると4月はあつという間に過ぎていき、そんなことも忘れてしまっていた。そして事前の準備、オリキャン当日、その後の班での集まりは、たくさんの人と知り合える機会を私に与えてくれた。知人、友人が増えるだけではない。この総科には様々な考えをもってやってきた



人がいるということを発見したし、総科についての情報を提供してくれる良き先輩との出会いでもあった。とりわけ総科は特異性のある学部なので、そういった情報はとても役立った。

次に内容について触れてみたい。私はキャンプと聞いて、ゲームやキャンプファイヤーぐらいしか考えていなかった。ところが、ディスカッションやシンポジウムなど予想とは違ったものも盛り込まれていた。その全てが充実していたとは言い難いが、自分は総科生であるという自覚はそれらを通して初めて生まれたように思う。いつもは一緒に御飯を食べたり、遊んだりしていただけの09、スタッフたちの真面目な一面をかいまみることができた。一見だるいそんな企画も、大事にしていくって欲しいと思う。

まあ、いずれにせよ、私が広大総科に慣れていくのにオリキャンが果たした役割の大きさはいうまでもないだろう。スタッフの皆さんに感謝したい。

09が斬る ～「よかった」神話にももの申す～

「今年のオリキャンは成功だった」。最近、特に教官の口からよく聞く言葉である。だが、新入生歓迎行事であるオリキャンを、09がどう受け止めたかを抜きに評価することはできないはずである。

キャンプの主役であった09生は、今年のオリキャンをどう感じていたか。キャンプ直後のアンケート調査も参考にしつつ飛翔の09生編集委員が今年のオリキャンを振り返る。

(アンケート調査は、飛翔編集委員とスタッフにより、キャンプ直後に行ったものです。)



◆オリキャンの目的

私に限らず多くの新入生が思う事だろうが、オリキャンは「上げ膳・据え膳」になってはいないか。何もかも用意されているので、何も知らない新入生はそのコースに乗っかって流されていってしまうのだ。オリキャン行事の1ヶ月間は、その後の大学生活とは全く異質なものであるように、私には思えるのだ。本当の大学生

生活とは自分で据え(創り)、自分で上げる(行う)ものではないか。にもかかわらず、新入生はその異質な1ヶ月間に慣れてしまい、それが終われば何をすればいいか分からなくなる。私はキャンプファイヤーで感動したのだが、その感動も、どうも自分で得たものとはいいがたいのだ。

大学生活は自由なだけに、自分のしたいこと、すべきことを見つけにくい。オリキャンはそのすべきこと、したいことを見つけるための道しるべになることも一つの目的だと思うのだが？

(執筆：松村 丞治)

◆シンポジウム

現在私にはシンポジウムで得た事は全然残っていない。そもそも私がシンポで何かを得ていたかどうか分からないのだ。シンポの直後には、それなりに考える事もあったのだが、それは雰囲気流されて考えたような気になっていただけのようにも思える。

アンケートの結果を見ると、09生は何かを得たように思える。しかし、今でもシンポで考えた事が残っている人はどのくらいいるのだろうか。自分が何も残っていないからといって他人もそうだとは限らないが、それでも疑問に思ってしまう。

もし何も残っていないのであれば、シンポ

はなくてもよかったのか。私は、何も残っていないくせに、シンポがない方が良かったとは思わない。「シンポの時に何かを考えた気がする」と、たまに思い出すだけでもシンポの意味はあったのではないだろうか。

(執筆：古川恵理)

- ▼シンポで考えたこと
- ・学生と教官の考え方の違い (13)
 - ・総科の意義 (12)
 - ・目標を持つとうと思った (8)
 - ・総科にきた理由 (7)
 - ・暑い、眠い (5)
 - ・難しくよくわからなかった (3)

※アンケートより一部抜粋

◆ディスカッション

アンケート結果で肯定的な意見が多かったことから、09生にとって有意義な企画だったようだ。

しかし、一つ気になるのは受け身的な感想が多いという点である。シンポジウムと決定的に違う点か自分の考えを発言できることなのに、自分の考えをまとめられたという回答が14%にとどまっている。

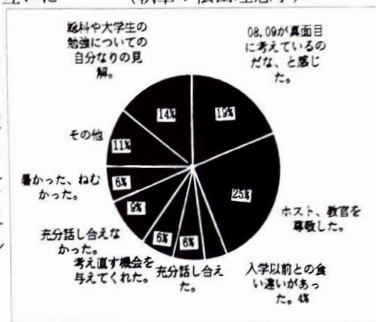
この原因としては暑さ・寝不足・準備不足等のマイナス

要因に加え、もともと発言する訓練ができていなかった事が挙げられるだろう。そして恐らく、それは今でも同じだと思うられる。もっとお互いに意見を交換をし、考えを深めてゆく場を持ちたくはないか？

そこで班活のようにオリキャン後もホスト班を基礎単位として様々な立場の人を交えてのディスカッション

を続けてみてはどうだろう。討論を重ねていくうちに、また新しい発見があるかもしれない。

(執筆：松田理恵子)



◆班活動

班員の意志に関わらず強引に班活動を行う力。果たしてそれは本当に必要なのだろうか。確かに班が解体してしまわないだけの求心力は必要であろうが、過度の、となると話は別である。

では、どうやって適度・過度を区切るのか。区切れるわけがない。班員個人の問題だからだ。徹夜が好きな人間もいればそうでない人間もい

る。飲み会でも然りだ。だから私は適度・過度の区切りを班活の「量」ではなく、「質」に問いたいと思う。つまり、適度の班活とは班員の結束を固め、班員一丸となってオリキャンの突き進むある種のパワーを生み出すものであるべきだ。いうならば「充実した空間」が必要なのだ。無駄に時間を浪費することなく、新入生を「大学の扉」に導く事のできる班活こそ、「適度」と言えるのではないか。勿論それはフェロー及びスタッフの手腕が問われるところである。

(執筆：青松伴晃)

オリエンテーションキャンプが終了してはや半年。こうして振り返ってみるとあの熱任の一ヶ月は何だったのだろうかと思う。「春の夜の夢」として次第に忘れてしまうのだろうか。

多くの人は言う「別にいいんじゃない、オリキャンは単なるきっかけなんだから」と。しかし本当にその程度でいいのか。ほとんどの総科09が一堂に会してイベントに参加する機会はオリキャンが最初で最後である。皆で苦楽を共にする唯一の貴重な体験をその程度で終わらせてはいけない。さらに09生には、来年入ってくる新入生にそれを伝えるという義務もあるのだ。したがってオリキャンは「過去の遺物」ではなく「未来への遺産」である必要があるのだ。

秋風に吹かれ、虫の音を聞きながらふと考えてみるのもまた一興ではないだろうか。

(09編集委員)



作るということ 「スタッフのオリエンテーション」になれるのか

08のスタッフが募集されたのは11月中旬。それからキャンブ当日まで、ほぼ6ヶ月間もの準備期間がある。2日間のキャンブを作るのに、この半年でスタッフが何をやっているのかは意外と伝わっていない。

以下ではオリキャン準備の大まかな流れを振り返り、また今回、新企画として出てきたシンポジウムが作られた経緯を辿ってみる。

▶オリキャン準備の半年間

11月

6日 スタッフ募集予定*1
(正式決定は翌週に延期)

13日 スタッフ正式募集
・サブスタッフ制導入の決定
・代表の決定
下旬 部署分け

12月

企画大枠決定

2月

教官の参加希望者1名*2
→参加依頼で教官回
りテスト期間突入
班分けの発表

1月

サブスタッフ募集

3月

5日 ホスト決定
教官アンケート始動

中旬 リハキャン説明会
リハールキャン
→反省会*3

4月

8日 新入生入学式

14日 顔合わせ

18日 K101会議*4

26・27日
オリエンテーションキャンブ当日
その後 打ち上げ
反省会

(注)

- *1 募集の為に人を集めたのだが、サブスタッフ制やスタッフの定義の点で大めし、翌週に正式募集が延びた。
- *2 今年から教官は自由参加になったが、予想の通り参加教官数は減った。もっとも、応募が切を明示しなかったスタッフ側の手落ちもある。
- *3 ここで出た最大の反省は、「失敗が出なかった事」だった。失敗するほど細かいところまで詰め切れていなかった。また、この時期学生代表は怪我で入院中。
- *4 他学部でオリキャン期間中に死亡事故が起きた事から、総科でも新入生の安全対策が根本から考え直された。連絡経路の整備・確認などの改善も当然行われたが、オリキャンの意味と役割と行動の許容範囲がつかない現実味を帯びて議論された。

「教育が悪い。」何十年も繰り返された文句を追うように、いくつかの痛ましい事件が起こる。すると、生徒達の間にも大合唱が起こる。「教育が悪い。」
こう言っておけばどこからも文句は来ない。大人達には誉められるし、何よりマスコミが「被害者の声」に飛びついてくる。教育も悪いのに違いないのだ、それを口にして何が悪い。
こうして無批判に批判が再生産される。全てが一つのキーワードで覆い隠されるが、問題解決の糸口は見つからない。

▶シンポジウムの作り方

★温故知新 (シンポはここから派生した)

今年のディスカッション企画班のスタッフが一番始めた事は、参加者として経験した過去のディスカッションの反省であった。ディスカッションの目的は新入生が教官や同級生と話し合うことで、これからの大学生活の指針を定めることだろう。しかし、去年の内容でその目標を達成できてたとは思えない。不意に「総科とは…」と話題を振られた新入生が、うまく話し合いに加わることができなかったのである。

そこで、ディスカッションで実際に話し合う前に、そのような内容について予め考えておく場を作ることとなった。こうしてまずはシンポジウムの原型が出てきた。

★教官アンケート

もう一つの大きな問題点は、スタッフが教官と話すのを嫌がるそぶりを見せてしまうことである。それではどんなに綿密な企画をたてても、口で何をいっても無駄になってしまう。参加スタッフの意識改革が必要なのだ。

そこで、スタッフに教官の事を知ってもらうことから企画は始まった。その手段としては、直接全員のスタッフが教官と話をするのは不可能なことから、代替案として教官にとったアンケートをみんなに見せるという方法がとられた。

しかし、このアンケートは単なる手段に留

まらなかった。「同じようなアンケートを学生にも取って教官にフィードバックしてはどうか」、「それらの結果を集計して学部生研究室に置いてはどうか」などの案が出始め、話は次第にオリキャンの1企画から離れて、教官と学生の関係の構築についての議論となった。この動きはオリキャンのみで終わらず、キャンブ後も長く続いて行くべきだというのがその晩(発案から質問用紙作成までが一晩の内に行われた!)、そこに集まったスタッフの共通した考えであった。

★シンポジウム

次に話し合い(シンポジウム)の題であるが、これは新入生が興味を持って、さらに教官・スタッフが話し合える内容ということで「総科で如何にして学ぶか」に落ち着く。それならば、今スタッフが持っている学部に対しての疑問、感想、考え方、をぶつけ主張してみることができる。また、この企画が新入生にはもちろんだが、スタッフ自身にとっても有意義な時間となるという判断もあった。

これらの何段階かの過程を経てシンポジウムは形づくられてきた。その過程で、スタッフはオリキャンだけに限らない総合科学に想いを馳せ、学部と学生のあるべき姿を思い続けてきたのではないかと筆者は思うのである。

(文責:松永 孝治)

学

部改革の必要性もまた、今日よく耳にする言葉である。実際に口にした総科関係者も多い事だろう。しかしその内の何人が、実際に学部の問題に行き当たっているのだろうか。総合科学という言葉自体がそれを口にするだけでまわりを納得させるような怪しい魅力を持っているのだから。

そ

ういった意味で、今年のオリキャンが示した可能性を高く評価したい。スタッフは半年の間、実際に総科の中を駆け回り回った上でキャンブを作ったのだから。惜しむらくは、そこから掘り出したものは、1年生には「大合唱」としてしか伝わっていないように思える事である。これは、キャンブという形態に起因しているのではないかと。キャンブという異空間で得たものは、日常に帰るとひどく現実離れして見える。勿論キャンブという形態はオリキャンの主要目的の一つである新入生の歓迎には非常に適した形であると思う。だが、単なる歓迎行事にとどまらないオリキャンの意見発信の基点としての新しい性格も、今後大事に育てていって欲しい。

更

にキャンブを作っていく内に得たものは08生の中にどのように残っているのだろうか。教官アンケートなどの動きはこれからも続いて行くのか。もしそうであるなら、オリキャンは同時に「スタッフのオリエンテーション」でもあったといえる。09生の感想ではないが、「真夏の夜の夢」として露と失せてしまうには、08はあまりにも多くの時間と労力を犠牲にしているように思える。目に見えなくともよい。オリキャンを苗床に何かが生まれてくるのを期待している。
(文責:石橋 淳也)



イ トンソク
李 東碩研究室 (A818)

社会科学コース 助教授



右から3人目が李先生

Q. 受け持っている授業を通じて生徒に伝えたいことは?

現代は、世界経済全体が今までの世界システム、秩序から大きく変わっていく時代。そしてその変化の根底には世界全体を利益基盤とする企業がある。自分の生まれ育った地域、日本という国家の中で無意識的に生きる土台である発想・生き方がこれから大きく修正されていく。目に見える日本国内の問題だけではなく、途上国も含めた世界全体の共通の問題に関心を持って勉強してほしい。

Q. 経済学を専攻した動機は?

大学2年生のときに、社会の根底にあるものを勉強したいと思い、いろいろな社会問題に関わっていくうちに、経済学の勉強になっていき、以来15年間続けている。でも、自分としては、経済学よりも「社会科学」を勉強しているという意識が強く、そういう立場から、難しい文献をまとめて勉強を本業としない人たちに分かりやすく説明することを自分の使命として考えている。

Q. 先生の人柄・私生活についてゼミ生から

- 「名前のおりすごいいい人。よく食事に誘って下さいます。」
- 「夜遅く訪ねていっても快く迎えてくれて、若い我々の意見をまじめに聞いて下さいます。」
- 「浜渦先生と経済学部の竹内先生と下見で畑をやってらっしゃいます。」

(取材: 萩 隆司・西山恵美子)

Q. 韓国での大学時代には、どんなことに興味を持っていたのですか?

自分の大学生の頃は、社会問題と自分を切り離しては生きられない社会状況だった。入学したときには、立派になって親孝行をしたいというふうに自分なりのバラ色の人生を描いていたけど、入学したとたん光州事件(韓国での学生運動が軍隊によって鎮圧された事件。多数の死傷者を出す。一編集者注一)が起き、友人が1人2人と亡くなっていった。また、かなりの人が軍隊に連れていかれ、そこで殺されたり、事故で死んだりしていった。大学時代の4年間はまさにそのような時代だった。それで自分だけの未来を少しずつ修正して行って、せっかくいろいろな人たちに助けられてこまできたのだから、社会のために、弱者のために少しでも役に立てれば、というように考えが変わってきた。今になって考えると、むしろこのような戦争状態の社会からいろいろなことを教わって、自分の考えが成長する契機となったので良かったと考えている。

コジマ=
ルー・クリステル
研究室

(A326)

外国語コース



前列左がコジマ=ルー先生

Q. Bitte lehren Sie den Inhalt von Ihrer Forschung.
研究内容を教えてください

Interkulturelle Kommunikation, besonders das deutsche Image von Japan und das japanische Deutschlandbild.
Fremdsprachen-Didaktik.
Und mein Hobby: Deutsche romantik, besonders der phantastische dichter E.T.A. Hoffmann.
異文化間コミュニケーション、特にドイツ人の日本に対するイメージと逆に日本人のドイツに対するイメージについて、そして外国語の教授法について研究しています。
そして、ドイツ・ロマン派、特に幻想的な作家である E.T.A. Hoffmann に関する研究もしています。

Q. Bitte lehren Sie Atmosphäre von Ihrer Büro
研究室の雰囲気を教えてください

Es gibt viel Literatur zu Interkultureller Kommunikation und deutscher Romantik. Außerdem alte Jahrgänge einiger deutscher Zeitschriften.
Wer lesen oder reden möchte, ist herzlich willkommen.
Beim Unterricht trinken wir gerne Kaffee oder Tee.
さらにドイツの雑誌のバックナンバーもいろいろあるので、本を読みたい人や語彙を勉強したいという人は遠慮なく研究室に来て下さい。
授業のときはよくコーヒーの紅茶を飲みながらしています。

Q. Bitte lehren Sie den Eindruck von Japanischen Studenten.
(Bitte vergleichen Sie Japanischen Studenten mit Deutschen.)
ドイツの学生と比べて日本の学生をどのように思いますか

Dan deutsche schul- und Universitätssystem ist ganz anders als das japanische.
Deutsche studenten sind im Durchschnitt älter und haben von Anfang an eine staeke Motivation für das fash, das sie wählen.Sie sind außerdem sehr kritisch und vertreten ihre meinung intensiv. die japanische uni ise mehr einer Obfeschule ähnlich.
Viele Studenten sind sehr ruhing, und leider ist auch die Motivation manchmal etwas schwach. Aber eigentlich macht der Unterricht mir immer Spaß.
ドイツの学校や大学のシステムは日本のものとは全く違います。そしてドイツの学生は自分の専門に関して最初から深いモチベーションを持っています。さらにはさらにもっとも批判的で、また自分の意見を激しく主張することができます。日本の大学はどちらかというとドイツの高校に似ていて、多くの学生はおとなしく、静かなことに誇りとしてモチベーションが低いように思います。
しかし実際のところ、授業は私にとっていつも楽しんでいます。

Q. 先生はどんな人ですか。【研究室の学生より】

- ・いわゆる「ドイツ人」らしくなく、とても柔軟で気持ちの優しい先生。
- ・アットホームな雰囲気であてをしてくださいます。
- ・とても優しい先生で授業中説明なさる時も面白い事を言って下さるので笑いがたえません。

(取材: 小林 直樹)

いわなが まこと 岩永 誠研究室 (A217)

生体行動科学コース



前列右が岩永先生

Q, 研究内容

- * ①仕事環境 (人間関係, ペース配分など) におけるストレスに関する研究 ②テスト不安に関する研究 (中学生を対象とする) ③音楽療法に関する研究
- こういったテーマを取りあげようになった理由, きっかけなどは?
- * 大学時代に, 不安について興味をもった。不安は, 目の前になく, 曖昧で漠然としているから面白いと思った。

Q, ゼミ生各人の研究内容

- * 「身体知覚のゆがみについて (例. 心気症)」, 「責任性がどの程度ストレスになるか」, 「音色が人間に及ぼす影響について」など

Q, 先生の趣味

- * 音楽鑑賞: 特にクラシック音楽。今よく聞いている曲は, ブルックナー, ショスタコーピチ, プロコフィエフ, エルガーの曲などです。
- * 読書: 仕事以外の本などをだらだらと読むのは得もいわれぬ至福のひとつです。

Q, 研究室の雰囲気

- * 学生は, M2が2名とM1が1名, 4年生が3人, 研究生が2名。みんな自由人。
- * マイペースでやり遂げるのが大切。分野にしばられずに, 好きなことをやってもらう。その分, 自分で責任をもってやる。

担当授業

- ・心と適応 (パッケージ科目)
- ・情報活用概論
- ・適応心理学
- ・行動制御論 他

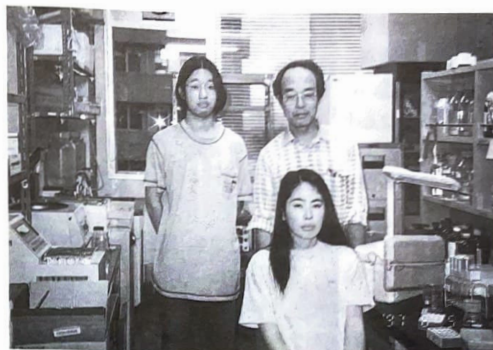
(取材: 渡邊 論史)

くさかべ 日下部眞一 研究室

C421

自然環境研究コース

後列右が
日下部先生



<教官> 日下部眞一
研究内容

- ・人間の由来をたずねる小型哺乳動物の分子系統学・分子進化学。
- ・生物の将来にかかわるムラサキツユクサを用いた遺伝子環境汚染モニタリング。
- ・大学教育・研究で市民権がえられていないフィランソロビー論の確立。
- ・目下, 「現代ボランティア論」テキストの編集・作成。
- ・NPO・NGO教育カリキュラムの開発。

◆研究室の雰囲気

- ・机の上が片づくときがない。 え!机がどこにあるんでしょうって!
- ・小企業で頑張っています。

◆学生に一言

- ・21世紀の社会は, 君たちが創っていきます。地球規模の課題が君たちを待ち受けています。日本を, 世界を変革していく大志を抱いて欲しい。

<学生>

◆研究室の雰囲気

- ・人数は若干少な目ですが, 部屋は広々としたスペースを保ちながらもシックにまとまっており, たいへん魅力的な空間だと思います。伸び伸びと勉学に励むにはもってこいの環境だと言えるでしょう。
- ・コンピューターも実験機械も使いほうだい (少人数のため)。

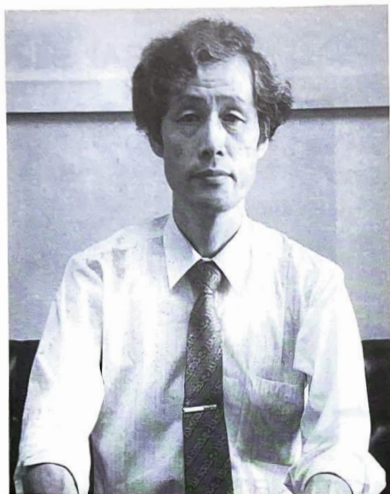
◆先生について

- ・大変勉学熱心な方で, 知識も豊富です。
- ・九州なまりの独特の intonation を交えた口調がシブイです。
- ・読書家です。

(取材: 松永 孝治)

講義をしながら 思うこと

奈良 重俊 (数理情報科学コース教授)



「飛翔」の委員の先生から「よりよい授業を目指して」ということについて何か書いて下さいと頼まれたのであるが、安請け合いをした後、原稿の期限が迫って考えると、この言葉自体が大変あいまいなかつ感覚的な言葉である気づいて困ってしまった。しかしながら、時すでに遅しというわけで多少(おおいに?)後悔し、かつ忸怩たる思いにかられながら雑駁な文章を読者におしつけることに相成った次第である。従って依頼された先生のご意向に沿った記事にはならないと思うが、それはあらがじめお詫びしておかなくてはならない。

とである。解くために入り組んだテクニクを使わなくてはならないとしたらなおさらである。熱心にはなり難い作業に長時間従事するためには要所要所でその集中・緊張を間欠的に緩和させる「何か」がいることは確かであろう。

予備校で名物先生と呼ばれる方々の授業はその「何か」を巧みに使って授業を飽きさせない。かくいう私も昔々予備校の先生をかなりの期間やった経験はあるが名物先生にはなれなかった。そういう目で大学の授業を眺めるときつと厳しい評価にしかならないだろう。それは一人一人の様々な学生さんにとって「なんのために勉強する必要があるのか」ということ自身がはっきりわかっているとは思えないからであるし(わかっている人がいたら失礼!), 教官の側からはこれといって全員に共通にかつ強固に提示できるものでもない(できる教官がいたら失礼!)と思うからである。昔の私も例外ではなく、友人から時々?誘われると講義をサボって友人とだべってしまったというのが私の昔々の思い出である。その意味では今、学生さんに「講義はサボるな、もっと勉強しろ」とは心理的にやましい所があつてなかなか強くは言えないのが私の目下の悩みのタネである。

少々脱線してしまったが、様々な問題意識をかかえた学生さんに対し、様々な研究の個人史を持ちまた様々な個性の教官が様々な科目の講義をする中、全員が予備校の名物先生のような飽きさせない授業ができるかというこれは不可能に近いことは誰の目からみても明らかであろう。

「よりよい授業」というのが大学ではなく、予備校だったらだいぶ話は見え易くなる。それは何のために勉強するかという目標・目的に当たるものが、ことの是非はともかく、教官・学生の両者の側でははっきりしているからである。予備校生にとっては、何よりもまず「わかり易く、かつおもしろい」授業であることが望ましいであろう。一方的に与えられた問題を(正解が既にあるということを前提として)解くという作業は、もちろん人にとってとはあまり自発的に熱心にはなり難いこと

役に立つかはさだかではないが、欧米での模様を眺めてみるのも興味深い。我々は欧米とひとくくりで言ってしまうが、アメリカとヨーロッパでは随分と異なる。ヨーロッパのうち私が実体験を持っているのはドイツとイギリスである。我が国には両国のうち、明治維新から第二次世界大戦前までは主としてドイツ的な制度(明治維新当時はプロシャと言つたらしい)が導入された。本当はヨーロッパとひとくくりにしてしまうのも危ないのであるが、きりがないので勘弁してもらうことにして、おおかたは強いエリート教育の歴史を持っている。つまり同一世代人口における大学への進学率が極めて小さく、それだけ小さい頃からの選別過程が激しくていわゆる放っておいても自分で目的意識を持って勉強ができる人たち(勿論全員がということではなく単に確率的に大きいということ)が大学に入ってくるということである。少なくとも私が長期滞在した頃まではそうだった。

誤解を招かないように断っておくが、今の日本をそうしろと考えたり言ったりしているのでは決してないことは述べておく必要がある。ドイツにせよイギリスにせよ社会全体の賃金水準が高く、別にしゃかりきに高学歴を目指す必要がない社会を歴史的に作り上げていた。日本とは全く歴史的な社会構造が違うのであるし、今は高い失業率に悩んで逆に日本型の教育的な体制の一部を見習おうという動きすらある。イギリスでは十何年前にサッチャー首相の時代から激動の教育改革が始まって今も続いており、イギリス人の旧友によるとあと十年かそこらの後にはイギリスの教育制度は全く異なったものとなっているだろうと、むしろ苦々しい雰囲気と言っていることが印象深いところである。

他方アメリカはそれとはずいぶん異なる。アメリカは人類の歴史上の巨大な実験室と呼ばれることからわかるように、あらゆる民族が集まっている。従ってその社会はあらゆる習慣や文化が同居しているので、契約によって物事を決めかつ動かして行かないと社会が立ち行かないのである。大学もしかりである。大学側と学生側が契約を取り交わして、大学は社会や学問の世界あるいは学生さんの側からのニーズに対応して、これこれの課程でこれこれの能力を養成するので学生はそれの対価としてこれこれの授業料を支払う。大学は学期を設けてその学期毎に単位を修得するような区切りを設け、その学期毎に厳しい教育を行いハードルを超えた者のみに単位を与える制度を作つたのである。

ここで私が強調したい重要な点は、日本においては第二次世界大戦以前はヨーロッパ的な制度が導入され、戦後はその入れ物の中にアメリカ的な制度がなだれを打って導入されたことである。歴史的に異なったものを同居させるのだから軋轢が生ずるのは当然のことである。日本は第二次世界大戦後、50年以上その軋轢を積み上げて現在にいたることを考えるとこれからどうするかを工夫することは焦眉の課程であることがわかるだろう。学生の能力を信頼し、意欲を信頼してある程度放っておき、教官はその人なりの個性的な授業をするヨーロッパ的なしくみと、契約を取り交わして全ての科目で学生のニーズを尊重しつつ学期毎の単位のレベルを設定してそこに向かって厳しい勉強を課するアメリカ的なしくみが相克状態にあるのが日本の現状だからである。

どうもとりとめのない文章を書き連ねて来たが、「より良い授業」のためになにをすべきかは私にもよくわからないというのが正直な感想である。教官ともあろうものがとんでもないことを言うとは非難の嵐を浴びそうだが研究者の正直さから発するのであるから仕方がない。ただ「わかり易い授業」を心がけてはいる。別に名物先生になろうというのではない。上に述べた大きな歴史的相克のただ中にはいるのだけれども、授業を選択した学生さんに私が学問として蓄積したことを伝えようと試みるのが大学人としての役割だと信ずるからである。



おなだち!

総科との縁、総科OBの縁

桑島道夫（静岡大学人文学部講師）

私の専門は中国現代文学だが、学部時代は広島大学文学部（中国文学専攻）、研究生、修士は同大学社会科学部研究科（国際社会論専攻）—学部単位でいえば、総科—、博士課程は東京都立大学人文学部研究科（中国文学専攻）というふうに、ふらふらと渡り歩いている。我ながら苦労したと思うし、実際、現在の職場（静岡大学人文学部）の先生から、「桑島さんは、苦労人だねえ—」と妙に感心されたこともある。自分の迷いがそのまま反映した経歴だといえるかもしれない。

総科には、1990年4月から1993年3月までのあいだ、つまり丸三年お世話になっている。今度、総科の三木直大先生から執筆要請を受けたのを機に、その時代を少しばかり振り返りつつ、総科の長所、短所などにも触れてみようと思う。

そもそも、なぜ社会科学部研究科に入ったのかといえば、学部時代にもっぱら接していた中国古典に興味を持てなくなり、それに反して中国の現代文学に身近な興味を覚えるようになったからである。文学部には現代文学専門の先生はおられなかったが、総科には松山久雄先生がおられた。実は、総科の理念を知っての転向というわけではない。

ただ、入ってみて、総科の理念的長所—学際的研究方法（態度）—に接することができた。具体的にいえば、松山先生の研究のありかたは比較文化論も視野に入れた幅広いものだったし、また、社会科学部研究科の制度としても、幅広く学ぶことを課していたから、中国に対する見方、研究方法を文字どおり学際的に吸収することができた—たとえば、中国近現代史の小林文男先生のゼミでは、中国との付き合い方について、いい意味で考えさせられることが多かった—。もちろん、文学部の、一つの分野を深く掘り下げるといった伝統的研究方法が間違っているというのではないが、こと新しい分野では、学際的という方法は、これからますます有効になるだろうと確信している。

ところで、これは総科の理念がどうのこうのといった話ではないが、いま振り返ると、総科に来てからほんとうにいろんな先生にお世話になったと思う。郭春貴先生（現修道大）には、研究生、修士時代、みっちり中国語を教えていただいた。あまり出来のいい学生ではなかったが、いま、曲がりなりにも中国語の教師としていられるのは、先生のおかげである。また、三木直大先生、小川泰生先生には、将来のことなどいろいろと相談に乗っていただいた。この御三方の先生にも、この場を借りて、感謝の念を申し上げたい。

では、なぜ博士課程で都立大学に転学したのかといえば、それは、地の利ということになるだろう。東京都立大学は、中国近現代文学研究が盛んだということもあるが、やはり東京にあるという点が魅力だった。東京に出てきたからこそ、さまざまな研究者—都立大に限らず—から刺激を受けることができたし、中国から気鋭の研究者が来日された折などに、討論の場を持つことができたわけである。

顧みて、総科の短所は、“地の不利”ということに集約されるだろう。総科に優秀なスタッフが揃っているのは確かだが、研究の新しい潮流や、気鋭の研究者と接する機会はやはり限られている—そういえば、小林文男先生もかねがねそのことを嘆いておられた—。しかも、文学部のように学統を守っていくところなら、地の不利ということの影響もそれほど受けないかもしれないが、やはり総科のような新しい、かつ偏らない学風を持つところに、地の不利は重たいように思われる。実は、都立大学に転学したのも、総科のある先生の助言によるものだった。

とはいえ、そんなことは総科のおおかたの先生も重々ご承知のはずで、なにもおまえからいわれる筋合いはない、とお叱りを受けるかもしれない。差し出口はこれぐらいにして—というのも、私は、東京で各方面の研究者から偏りが無いといわれてきたし、都立大のある先生からも、きみはいろんな大学のいろんな長所、短所を見てきたわけで、そこを売りにするといひ、といわれたことがあるが、そもそもそういった、ある学統に偏らないありかた自体、総科的なのかもしれない。

東京に出てきたばかりのころ、かつて広島大学教養部におられたI先生の研究室に、専門が同じというご縁もあって、ご挨拶に伺ったことがある。I先生は、全国に先駆けて着手された教養部改革にみずからも関わったことを誇りにされているようだった。また先だって、就職の挨拶状を差し上げたところ、総合科学部の卒業生であり、松山さんのお弟子さんでもあり、専門もいっしょ、という三重のご縁のあるあなたが専任のポストに就職されたとは—と感慨のこもったご返事をいただいた。

さらには、I先生同様かつて広島大学教養部におられた、同業のM先生と、私の留学先上海でたまたまお会いしたことがあったが、そのときも、私が総科出身だと知るとほんとうに懐かしがられ、それが原因かどうかは知らぬが、豪勢な昼食をごちそうになった。

教養教育改革、大学改革が、有無をいわさぬ状況のなかで行われており、さまざまな困難もあるでしょうが—静岡大学もいまたいへんな時期に差し掛かっています—、総科に愛着を持つOBが各地にいるということを報告して、教官、学生の方々への激励に代えたいと思います。

1997. 6. 30

